

第5章 業務・活動報告のまとめ

2013年度は、構内遺跡の発掘・立会調査、出土資料の整理作業、展示会、資料貸出、資料調査協力、出土資料の自然科学分析といった業務を実施した。それに加え、各調査室員が個別に研究教育活動を行った。それぞれについてまとめると、以下の通りである。

【構内遺跡の発掘・立会調査】

発掘調査は、南常三島地区で2件実施した。常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点）では、二つの武家屋敷（安政年間には杉浦家と寺沢家）の境界に位置する溝を検出した。この溝は、それに切られた整地層から出土した陶磁器の年代によって、17世紀後半以降に掘削され、19世紀末までに埋没したと考えられるが、詳細な時期については、今後、整理作業を進める過程で検討する必要がある。常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）では、17世紀中頃以降に造られた水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出された。これによって、近世常三島地区での武家屋敷内の空間利用の一端が明らかとなった。今後、屋敷地全体の空間利用についても、整理作業の結果をふまえて鮮明にしたい。

立会調査は、蔵本地区で5件、南常三島地区で5件、合計10件実施した。そのうち、蔵本地区・立体駐車場新営その他電気設備工事地点では、隣接する庄・蔵本第27次発掘調査でも検出された弥生時代から近代の包含層が確認され、弥生土器片や石器なども出土した。また、蔵本地区・立体駐車場新営その他工事地点では、徳島大学医科大学・附属病院設置直後の遺物を収集することができた。さらに、南常三島地区・課外活動施設新営工事地点では、近世に属する可能性のある溝あるいは土坑、杭跡が検出された。

【出土資料の整理・公開・活用】

整理作業は、新蔵遺跡、庄・蔵本遺跡第24～29次調査地点出土資料（合計7地点分）について実施した。展示会は、本学ガレリア新蔵展示室にて、第6回特別展「徳島大学の至宝 庄・蔵本遺跡の出土品 徳島大学構内遺跡出土品展示会（その1）」を開催した。また、徳島県立博物館常設展、徳島市立考古資料館特別企画展・企画展の3件について、庄・蔵本遺跡出土の遺物と写真の貸出を行った。資料調査協力は、県内および西日本各地の研究者・学生から8件の依頼があった。そして、庄・蔵本遺跡第27次調査地点旧河道埋土試料の花粉分析、同調査地点出土炭化種子の同定・年代測定を外部機関に依頼し、実施した。

【調査室員の研究教育活動】

本年度は、調査室員の出入りが著しく、通年で5名の室員によって研究教育活動を実施した。研究業績は、論文8件、研究発表10件、外部資金3件を数える。また教育では、授業5件（全学共通教育4件、非常勤1件）を担当した。

（端野晋平）